

Middlemarch

1. Dorothea の Mr. Casaubon との結婚における過ちについて

嶋 田 貴美子

(前号からの続き)

Dorothea が、自分が勝手に作り上げた Casaubon の偶像と現実の姿とのギャップをこのように過大な失意をもって眺め、偶像よりもずっと重みのある彼の現実の姿を、それはそれとして認めてその中で何とか折り合ってやっていこうという気持のゆとりを全く持てなかったのは、結婚後余りに早く訪れた理想の崩壊のきざしにすっかりとまどってしまったのと、理想的人生になおかつ拘泥せざるをえない18歳という Dorothea の若さゆえのことであつた。それで Dorothea は、夫 Casaubon に対する、また彼の有りようから派生する自分の real future に対する葛藤から救われる一縷の望みを、Casaubon の人生をも絶対化するはずの *Key to all Mythologies* を何とか彼が完成し、そして出版することにかけていた。そういった Dorothea の、夫 Casaubon への失意といら立ちと寂しさがたれこめた心の内は、数週間にも及んだ Roma での新婚旅行の日程もあと数日を残すだけとなったある朝、次のような言葉となって夫の Casaubon にぶつけられたのである。

「あの何冊にもおよぶ注釈ですの？ それではあなたがこれまでよくお話をさしてきたことをいよいよなさるのですね、つまり、それらの膨大な注のどの部分を使うかをお決めになってあなたの広範な知識が世の中のお役に立つことができるような本を書き始められるのですわね。私、あなたの口述されたことを書きますわ。あなたに指示されたとおりに書き写したり抜き書きしたりいたしますわ。私は他のことでは何もお役に立てないのですもの」
(chap. 20)

過度の感情を露にされただけでもひどく心を混乱させる Casaubon であったから、このことを目にいっぱい涙をためてすすり泣きしながら言う Dorothea の、彼には全く訳のわからないその陰気な様子に大いにとまどったことも手伝って、Dorothea のこの言葉は、彼の耳には自分への残酷な批評の声にきこえ、Dorothea は初めて彼をひどく傷つけ怒らせることになったのであった。助手を置くことなど頭から拒否したことからもわかるように Casaubon 氏の研究態度には、彼の元来の高慢と狭量な性格が反映され、自分の研究を人にのぞかれるのを好まず、それは自分の研究への自信のなさといひあまって、自分に向けられる他からの批判に彼を極めて過敏に反応させたのである。彼は日常のすべてについて unimpeachable であろうと努め、またそうすることができたのであったが、しかし Oxford 大学在学中以来の30年近くにも及ぶ苛酷な勉学の日々を強要してきた、現在の彼の存在のすべてでもある *Key to all Mythologies* を unimpeachable にすることの困難さは、鉛のように彼の心に重くのしかかっていた。特にさらにその著書に対して彼の気持を sensitive にしていたのは、母校 Oxford

大学の Brasenose 学寮の Leading minds⁽¹⁾ に対する敵愾心であった。また彼らにその著作の不朽の価値を認められるどころか、彼らがその著書を歯牙にもかけないのではないかという思い、すなわち、彼の過去、現在、未来を全く無意味なものにしかねないという思いは、恐怖となって時々彼を襲ったのである。

Dorothea がいかに聡明であったとしても、Casaubon のそのような辛酸をきわめた心の状態を百パーセント理解することは無理であったとはいえ、Casaubon が妻の心の中の悩みを全く知らなかったのと同様に、Dorothea もまた夫の心の中にも哀れむべき葛藤が隠されていることを知らなかったのである。しかし Casaubon は自分の著作に対して彼の心の中にふつつつとしているこのような不安や恐怖を妻の Dorothea に知ってもらい、いくらかでも心の負担を軽くしようとは思わない。Casaubon が妻に求めていたものは「彼の膨大な走り書きや広汎な書類の山を、優美な心根のカナリアのように、批判もせずただ畏れてながめる」ことであつたのだ。
(chap. 20)

そのような Casaubon の心の内外の諸事情を考慮すれば、上に引用した Dorothea の激情にかられた言葉は、Casaubon 氏にとっては、彼らの結婚前に彼が Dorothea の中に認めた、強い自己犠牲的愛情を持ったやさしい乙女の殻を彼女がいつのまにか脱ぎ捨てていて、彼のプライドが常におびえているまさにその外部からの非難者 (accuser) となり、「いまわしい推理力を働かせてすべてのものを観察するスパイ」であることを明らかにする言葉のようにきこえたのは当然であろう。Dorothea を知るようになってから初めて Casaubon は激しい怒りの表情を浮かべ、心を次のような想念で満たしたのである。
(chap. 20)

彼は以前は正当な対象を崇拜する彼女の素質を大いに評価していた。しかし今やこの素質が出しゃばるという僭越な行為にとってかわって、その崇拜が最も腹立たしい批評—あまたの立派な目標を漠然と見て、そこに到達するに至る間の苦労はほとんど無視することからくる批判—にとってかわるかもしれないということを予見して、突然の恐怖に襲われたのであつた。
(chap. 20)

夫の *Key to all Mythologies* が出版され、さらにそれが *Pensées* と同列に並ぶほどのものであつてこそ Dorothea の心の中において Casaubon は夫としての意義を持ちうるのであるということと共に、なおそれが彼だけのものではあつてはならずその実現に自分も何とか参画したい妻と、自分のその著作が完成された暁には妻が心に描いているとおりの一級のものになるに違いないが、自分の学問的世界は、自分にとっては単なる無知な一傍観者であるに過ぎない妻の、そのように軽々しい安易な推測では決して推し測れるものではないとする自負のために、頑として自由にそこへの妻の出入りを許そうとはしない夫との間に、それまでにうっ積していた気持のギャップが、新婚旅行という、お互いに向き合うことの多い特別な状況におかれて初めて一挙に表面化したのであつた。

Dorothea が Casaubon の研究に対して思わず表に出してしまったそれらの言葉の持つ彼女の僭越さをいさめる夫の言葉に、極端に純粹で (simple) 率直な (direct) 性格であるがために夫婦なるもののそのような気持の行き違いに過度に敏感になってしまう Dorothea は、それまで Casaubon との結婚に抱いていた自分の前途にある長い人生に開けていた希望に満

ち満ちたすばらしい展望が、根こそぎひっくり返されて、彼との結婚もこれで破局を迎えたかのような印象を持ったのである。一方、結婚はしてみたもののそれは自分を有頂点にするものではなかったことがわかった Casaubon は、ならばせめても妻に、「残酷な、実体のない影のように常につきまとい、そして決して心からの称讃を与えようとはしない彼の人生の聴衆 (audience) に対するやさしい垣根」になってもらいたいと思っていたのに、今やその妻である Dorothea は、真価を認めてもらえない落胆した (Key to all Mythologies の) 著者を取りまく世間の、よりしたたかな化身 (personification) なのであった。それで Casaubon 自身もまた、想像していたものよりもはるかに多くの従属を強制される結婚というその緊密な結びつきと、新婚旅行なるものにそれまで感じたことのない心の痛みを感じたのである。そして Casaubon が、その時感じた Dorothea へのその思いを、彼らの結婚生活の最後まで引きずっていて、その後 Dorothea にたいしてますます疑心暗鬼になっていったのとはうらはらに、Dorothea の方はその時の怒りと失意をすぐさま克服し、なおかつ Casaubon との生活の中にあるはずだと信じる fullest truth と the least partial good に彼女の all thought と all feeling を向かわせたのは、18歳という Dorothea の若さがもたらす意識の柔軟性の賜であろうか。

(6)

つまり Casaubon を偉人とみなし、妻として彼をいたわり彼の学究生活に献身することによって偉人としての彼の背後にあるはずの壮大な学問的世界にせめても立ち入ることを許され、そしてできうる限りその世界を知ることによってその世界の完成のためにさらに彼を助けること、そしてそうすることの中においてこそ自分も wise になり、輝かしい光に照らされた善なる自己を確立できるであろうという遠大な理想の下に Casaubon と結婚した Dorothea であったが、目下のところ Casaubon には、そのような若き Dorothea の燃えるような理想に応えるべき世界など何もないばかりか、Casaubon 自身が自己の確固たる学問的世界に導かれる手がかりを模索することに懸命で、自信をもって Dorothea をその世界に招き入れる余裕など全くなかったのである。そしてさらにそれまでの、自己の全精力を駆使してもなおほとんど実を結ぶことのなかった学問上での長年の労苦は、50歳に近いその年齢へのあせりと、彼の人生を批判的な目で常に見つめている世間に対して潜在的な強迫観念がいやまして、彼の心も学問もますます偏狭になり彼をへとへとに疲れさせていたのであった。しかしいかに疲れているとはいえ、彼のきまじめな性格と、目標に向かう貪欲さ、さらには自分を評価しない世間を向こうに回して自己の誇りを汚すまいとする彼の並はずれたプライドは、自分の娘以上の年齢差のある美しい若い妻を、共同生活者として思いやる心の労もその時間も許さず、結婚前よりいやますほどに、なおもただただその学問にしがみつくとしか彼にさせない。そういう偏執狂とも思われるような老境の入口に立つ夫と、結婚前に描いていた理想の世界が見当たらず、まさに招かれざる客のように行き場を失って途方にくれている18歳の妻との間には、4、5週間前に彼らの婚約披露パーティーの席上で Cadwallader 夫人が “... Mark my words:

in a year from this time that my girl (Dorothea) will hate him. She looks up to him as an oracle now, and by-and-by she will be at the other extreme. All flightiness!”と
(chap. 10)
言った言葉を待つまでもなく、その結婚の当初から、強い夫婦の絆など形成される兆しは全くなかったのである。さらに事態を深刻にしていることは、Casaubon の側の、夫たるものの実像がはなはだ貧弱であることに当人が全く気付いていないことである。Casaubon 氏は婚約時に作成した Dorothea への財産譲渡を示した遺言書が誰をも満足させるものであったことと、
“... See Roma as a bride, and live thereof as a happy wife.”
(chap. 20)
と言っていることから、Dorothea をはるか遠い Roma まで新婚の旅に連れてきたという形態だけで、自分を an irreproachable husband, who would make a charming young woman as happy as she deserved to be と考えているのである。そのような Casaubon に、今のままでは暗澹たるものに覆われている彼ら二人の未来を少しなりとも明るい展望が開かれたものにするために、夫として、Dorothea との夫婦関係を、あるいは彼らの生活形態だけでも改善する建設的な主導権を期待することは絶対的に無理であった。

これまで何度もみてきたとおり、Casaubon と Dorothea が彼らの結婚を成り立たせるものとしてお互いの心の中にあつたものは、Casaubon の側は独り身の殺風景な生活の装飾品としての Dorothea の姿であり、老いが身辺に押し寄せた時に絶対的なものとして希求する Dorothea の若さであつて、一方 Dorothea の方は、子供の頃からの自分の理想の実現にはなくてはならない、Casaubon の中に瞬間的に彼女が見た偉人の姿であつた。すなわち Casaubon も Dorothea も形骸化した相手の人の虚像と結婚したのであつて、常識的な結婚の概念に於てはその根底を成す、お互いの強い愛情に基づいた、性の結びつきとしての意識は彼らの結婚には全くなかった。前号の(2)の部分で述べたように、古くから Casaubonを知る Middlemarch の人々の言葉からもわかるように、長い間の学究生活で情緒の面がすっかり枯渇してしまっているために人を心から愛することがどのようなものであるかも知らず、経済面での恩恵という物質的な糧が愛であると感じがいている Casaubon と、強い Puritanism からくる禁欲的な思考形態と若さゆえの理想を追い求める激しい志向のために、結婚を higher duty としか考えなかった Dorothea 夫妻には、better half として互いに求め合いより添うべきよりどころが全くなかったのである。

しかし、結婚したからといって自分の内的生活も外的生活もほとんど変えることなく、若く美しい乙女である Dorothea の、妻としての身近な存在に、多少の潤いと煩わしさとそしてまたとまどいを感じるだけで、実に単々と日々を過している Casaubon にとっては、自分たちの結婚が特別不幸なものであるとは考えられず、Casaubon との結婚生活を幸とか不幸とか破局とか考えるのは、常に一方的に Dorothea の方であつたのであり、そうである以上、Dorothea 自身と彼らの結婚生活の両方を救う鍵は、Dorothea 一人の心の中にあつたのである。それで Dorothea は、前の章の最後に述べたように、そのような八方ふさがりの状態の中でもなお屈することなく、the fullest truth と the least partial good を求める気持に自らの将来の光を托したのであつた。

そのようにして Dorothea は、彼らの結婚生活の初期にすでに味わった Casaubon 氏の学問的領域から締め出されている寂しさと、Casaubon 氏の学問的権威への懷疑から感じた自己の理想の崩壊の兆しを、けなげにも克服したのであったが、それも束の間のことで、数週間にも及んだ Roma での新婚旅行の日程も終りに近づいたある日、偶然の邂逅を持った、Casaubon 氏の second cousin である Will Ladislaw によって、偉大な人としての Casaubon の偶像は決定的に崩されたのである。

Will が Casaubon の母親の姉を祖母に持ち、早くして両親を失って以来 Casaubon に引きとられていた関係からすれば、Casaubon 氏は Will にとっては最高の恩義のある人ではあったが、Mr. Casaubon と長年一つ屋根の下で暮らしてきた間に、Will の心の中には恩人として Casaubon を敬う気持とはうらはらに、Casaubon への数々の憎悪が生まれていたのである。そして Will は、若く美しい Dorothea への崇敬の念と、Casaubon の妻としては全くふつりあいに思われる彼女の清純さと率直な性格への敬愛から、そのような非の打ちどころのない女性を妻にしている Casaubon への嫉妬も手伝って、Casaubon 氏の人格やまたその人格と表裏一体を成している彼の学問を Dorothea の前で徹底的に批判したのである。Will はしっかりと学問的根拠を持って、Casaubon の学究態度が神学の分野では最も重要だと思われるポイントを外したものであって、彼が今後もまたどんなに骨身を削ってその研究を続けようとも何の実を結ぶことのない無意味な結果に終るであろうと断言する。結婚して現実の光の中で夫 Casaubon を見るようになって数週間が過ぎ、新婚旅行中であるにもかかわらずその Roma で独り研究に没頭している夫を見るにつけても Dorothea は、結婚前に自分が Casaubon の中に見ていたものが空中の楼阁であったことをおぼろげに感じ始めていた時期でもあり、その Will の言葉に大きな衝撃を受けたのであった。そして初めて Dorothea は夫 Casaubon に対して a pitying tenderness fed by the realities of his lot and not by her own dreams を感じたのである。結婚して現実の光の中で夫を見るようになって夫の中に偉人を見る目はおぼろになりつつあったとしても、Dorothea は Will に “...such power of persevering devoted labour as Mr. Casaubon's is not common” と言っているように、夫の学問的権威はともかくも現実の目で確認できる Casaubon の辛苦勉励の生活には、結婚する以前にもまして敬服せざるを得ないものを感じていた。それで Dorothea の心は、夫の積年の労苦も、それゆえに夫の全人生そのものも無に帰することになりそうなその事実、自分の将来をかけた理想が完全に崩れたことの失意以上に、夫の運命に対して衝撃的な憐憫を感じたのである。その衝撃を経てやっと Dorothea は、「それまで自分は自分の強い思いに対して Casaubon からの応答を期待するというようなとんでもない幻想の中にあったのだということを知り始め、そしてまた、彼の人生にも悲しい意識があつてそれが彼の方にも自分と同じぐらいのせっぱつまった要求を成しているのかもしれないという予感が目ざめ出すのを感じた」のである。もはや Dorothea の、夫に対する敬意は、Pascal や Bossuet に対するものとはほど遠く、虚弱な彼の体に長い間労苦を強いてきたその学問に対する夫の献身への敬意というものにすっかり質を変えてしまったのである。

(7)

結婚してまもなく、夫 Casaubon の学問の世界と、夫の妻である自分への愛情とに懷疑を抱き始め、Roma という遠い過去の時代における文化的な中心地に新婚の旅に赴き夫とただ二人世間から隔絶して暮らす中で、ますますその懷疑が深まり、そしてさらに帰国する間際に Roma で再会した Will Ladislaw によって Casaubon への幻想が完全に打ち消されて、Casaubon の妻としてこれから先生きていく自分の人生が、結婚前には想像だにしなかったほど寂しいものであることがわかった Dorothea が、長期間にわたった新婚旅行から彼女の終生の館である Lowick 邸に帰った時に邸の周囲を見た目は、Casaubon の偉大さを信じその彼に自分のはるかなる夢と希望を托していた頃の、妹の Celia にはどんなに陰気に見えたものであってもそれが自分にもっとも似つかわしいものとして親しみを持ちえたものから、すべてが生命をもたない亡霊のようなものへと変わってしまっているのを確認したのであった。すなわち Lowick 邸で彼女を待っていたものは、高すぎた理想が消えた後の、自分の若さが予測するえんえんとして続いている未来に対する大きなとまどいであった。しかし彼女の若い生命力はそれに屈しさせない強い決意を彼女に与えたのである。

彼女が結婚した後の義務は、以前はあれほど大きく重要なものと思っていたのに、今や家具や、白いかすみにさえぎられている風景と共にどんどん縮んでいくように思われた。欲するがままの知識を得ながら歩けるものと期待していたあの晴ればれとした丘は、想像の中ですら見ることは困難になってきたのである。完璧に秀でた人に頼る時のあの魂の甘美な休息はかき乱されて不安な努力へと変わり、ほの暗い予感におびえていた。夫の生活を励まし自分自身の生活をも高揚させるはずの、妻としてのあの意欲的な献身の日々は一体いつ始まるのだろう。そのような日々は、以前彼女が考えていたようには多分始まることはないであろう。しかし何とかして——いや何としても始めなければ。このように厳かに誓った結婚なのだから義務は何か新しいインスピレーションの形をとって姿を現わし、人妻としてのその愛に新たな意味を与えてくれるであろう。

すなわち Lowick 邸に帰って Dorothea が感じたそのとまどいは、Casaubon との結婚の中に
(chap. 28)
あるはずだと彼女が思っていた guidance into worthy and imperative occupation によってきつとそれから逃れることができると確信していたにもかかわらず、今もなお the stifling oppression of that gentle woman's world (上流階級にある婦人の日常の息づまる重苦しさ)、つまり gentlewoman's oppressive liberty がなおもしつこく彼女の身を取り囲んでいるという実感であった。Dorothea の Casaubon との結婚は彼女の理想の実現どころか、長い一日を拘束も強制もなく過ごさなければならない、彼女が憎悪していた上流階級の娘の現実の生活からの脱出の手段にすらならなかったのである。

一方 Casaubon の方も Roma での Will との邂逅以来 Dorothea に対する気持の中に一つの新しい要素がつけ加えられていた。それはこれまで見てきたように愛や喜びやあわれみなどの情感が枯渇してしまっている Casaubon からは想像しがたい一種の jealousy であった。彼の jealousy については George Eliot は次のように解説している。

嫉妬の中にも、それを燃えたたす火をほとんど必要としないものもあるのだ。それは激情などと

いえるものではなく、不安なエゴイズムのもたらす晴れやらずじめじめした落胆の中で育てられた一つの精神的荒廃の表われであった。

(chap. 21)

(5)の部分でも見たとおり、彼の jealousy の多くは Brasenose 学寮の彼の学問上の同輩に向けられていて、それがまさに彼を駆ってその全生涯を学問に向かわせていた原動力なのであったが、その全生涯をかけてきた要求と、その要求がなおも満たされない気持は、巡ってさらに彼を嫉妬深くし、その矛先は学問上でのライバルに限定されることなく、まずは自分の留守中に妻を訪ねて来た Will に対して、そしてそれから、Will の来訪を快く思っているように見受けられた Dorothea に向けられたのである。

Casaubon は自分の生き方が burrowing kind (じみちな努力を重ねて一步一步着実に進んでいく類) のものであるのに比べ、Will が自分とは全く正反対に honey-sipping (おいしい蜜だけ吸って歩く者) であることにともともと強い反感を持っていて、そのようなじみちな人生を歩んでいる自分を Will がひそかに軽蔑しているかもしれないという思いが Will に対して常にわだかまっていたのである。

そのような Will に対する jealousy を少しでも軽減し確固とした優位を保つためには、Will の生活費として小切手を振り出し、Will の求めには積極的に恩恵を施すことであったのに、Lowick 邸に帰ってからまもなく届けられた手紙の中で Will は、それから後の Casaubon の自分に対する経済的援助の一切を断ってきたのであった。Casaubon の Will にまつわる不安、嫌悪、jealousy がいっそう募ったのは言うまでもない。

(6)の部分でみてきたとおり、Will は Will でまた多額の経済的援助を受けていたにもかかわらず Casaubon を憎悪こそすれ好意らしい感情を彼に対して一度も抱いたことがなく、Dorothea の人となりを知るにつけても、人間らしいまっとうな感情も持ち合わせず老いさらばえたミイラのような Casaubon が、そのように女性としての完璧な資質を持った Dorothea を妻にしたことに対して、長年にわたって彼から受けてきた恩義をふみにじってまでも正当化できるほどにまで嫌悪感を募らせていたのであった。そしてその嫌悪感に彼は次のような正当性を見い出していたのである。

Casaubon は Dorothea と結婚したことで彼女に不正を犯したのだ。男は自分自身をよく知る義務があり、そんなことはしてはならなかったのだ。そしてもし洞穴の中でぎしぎし骨をきませて老いさらばえていこうとするなら若い女性をおびきよせて自分の伴侶にする権利などなかったのだ。

(chap. 37)

Will には、いかに Dorothea が自ら進んで Casaubon を夫に選び、自ら進んで、その主である Casaubon 自身と同様に陰気で生命力に乏しい Lowick 邸での生活を選んだとしても、その決意の時点では予想だにできなかった悲しみを今や心に秘めているであろうことをよく理解できた。それで Will は Roma で Casaubon 夫妻に会って以来、Casaubon には嫌悪感を Dorothea には同情と崇敬の念を募らせていたのである。そのような夫と Will の感情の行き違いや、また Will の自分に対する気持、そして夫の、Will と自分に対する jealousy などについてはつゆほども知らない Dorothea は、Will は Casaubon のこの世に存在する

たった一人の親戚であり、Casaubon が Will への援助は決して惜しまず、Will に殊の外親切だったように見えた最初の印象のままに夫の善良さの権化として Will を考え、その基準で Will のことを夫との話題にのぼらせもし、Will との友好的な関係を持とうとしたのであった。しかしそうしたことによって、Dorothea はすでに Roma で Casaubon の機嫌をそこねたことがあり、夫の心の中にある Will への不可解な感情に気が付き始めていた矢先に、Roma から帰ってまもなく will から届いた Casaubon 宛と自分宛の手紙をめぐって Casaubon が示した意地悪な言動に、Dorothea は今度ははっきりと、夫の性格には「どうしようもないほどの物わりの悪さといやらしいほどの不条理な部分」があることを感じたのである。Dorothea は、Roma で Will の話をきいて夫が自分が心に描いたような偉人ではないということを知った時には、自分の少女時代からの夢が壊れたことへの悲しみよりもむしろ、人生そのものを棒に振ることになる夫への同情を心の中にかきたてたのであったが、かくも貧しい心を持った夫の実像を垣間見てもはや夫をも、そしてそういう夫に対する自分の心をも救いようのない失望を感じたのである。

Casaubon のそのような意地の悪さや狭量な警戒心を憎悪した Dorothea が、夫 Casaubon に初めて見せた嘲りと憤りのこもった的をついた激しい反論に Casaubon は、“We will, if you please, say no more on this subject, Dorothea. I have neither leisure nor energy for this kind of debate.” と引きさがらざるをえなかった。しかし自分を弁明し切れなくてすっきりと晴れない心のうちが引き金となって、まもなく Casaubon は最初の心臓発作に襲われたのである。

(9)

そのように Roma で偶然 Dorothea の前に現われた Will Ladislaw は、彼女にとっては夫 Casaubon の存在そのものをまさに有りのままに映す鏡となった。Will の差し出す鏡をのぞくことによって、Locke や Augustine や Milton などと並ぶ一級の偉人という幻想の(4)(5)(6)ボールをはぎとった Casaubon の真実の顔が次々と映し出されていったのである。まずは Casaubon は、何の実も結ばないと Will によってはっきりと断言された研究に自分の人生を捧げ、日夜粉骨砕身の努力を傾けている憐れむべき三文学者であったのだ。それからさらにその鏡に映った Casaubon の顔には、一見何の情緒も浮かばない、世間と隔絶して勉学にいそしむ人の顔の中に認めるにはとてもふつりあいな、嫉妬深くて人をぞっとさせるような非人間性がのぞいていたのである。そしてまた Dorothea は、それまで彼女が自分の若さの光の中では決して見ることのなかった、すでに死の影が漂う虚弱な老人の姿をもその Will が呈示した鏡の中の Casaubon に見い出したのであった。

今後の残された人生を少しでも長いものにするためには過度の研究と精神の動揺を避けることが最も肝要だというやっかいな病である心臓病が Casaubon の持病となってから、Casaubon への Dorothea の接し方は sensitive な夫の心の琴線にふれることを言わないようにますます過敏さを極めるようになったが、夫が自分に対して愛のかけらもなく、意地悪で狭量で嫉妬

深い性質であることを知ってしまった以上、Dorothea にとって夫はもう妻たる者の崇高な義務の対象でも、また Dorothea があれほど期待していた人生の師でもなくなってしまうていた。そのため Dorothea は夫との意思の疎通がますますできにくくなっていくのをどうすることもできなかった。Dorothea は夫が彼女の言葉の一つ一つに内心反感を抱いているのを感じることがしばしばあった。愛を投げかけることも受け入れることもしてはくれない夫と共に過ごす生活を Dorothea はどんなに悲しく寂しく感じたか計り知れない。折しもとり行なわれた、死のまぎわに到ってもその莫大な財産をかかえこんでいた意地悪で強欲な独り暮らしの Featherstone 老人のお葬式をみて “...I cannot bear to think that any one should die and leave no love behindd.” という Dorothea のつぶやきこそ Casaubon の最後を暗示するものであろう。それはまた、かつて夫の中に描いた幻想と現実の夫の姿のギャップに言い知れぬ絶望と悲しみを感じた Dorothea の真実の声であった。しかし adorable simple で full of feeling である Dorothea はそのような Casaubon を見限るようなことはしない。Casaubon の学問的な能力とは別個のところにある至極客観的な、他に類を見ないであろう彼の辛苦勉励の姿への敬意と、理想がくじかれたことの彼女の失意などには比べものにならないほど大きなものであろう Casaubon の心の中にある自己の学問に対する無念さや不安や失望等々を思いやることを忘れてはいない。それで夫が最初の心臓発作に倒れて以来 Dorothea は夫への憐愍の情にかりたてられ、以降の Casaubon との生活を、夫をいたわり夫の学問にますます献身することに徹しさせたのである。

Will Ladislaw は自分に向けられている Casaubon の憎悪や jealousy について知ってはいたがそれほど意に介することはなく、Dorothea のおじの Mr. Brooke が定職を持たなかった Will を自分の邸に寄宿させ Pioneer という新聞を発行する仕事を共にするようになって、Casaubon が Lowick の自分の邸への出入りを禁じたのにもかかわらず Dorothea と会う機会がふえるにつれて、Roma ですでに人知れず Dorothea の中に見ていた永遠の女性への憧れは、次第に Dorothea への恋情へと変わっていったのである。

Dorothea はその Will の自分への恋心を知る由もなかったが、Casaubon の心の貧しさを知り Casaubon との意思の疎通もない日常を過していた Dorothea にはその Will との会話がとりわけ楽しいものに思われたのは当然であろう。彼女は生まれて初めて自分の思うことをそっくりそのままの形で理解してくれる人に会えた喜びを感じるのである。しかし Dorothea は Will との会話が進むにつれて Casaubon の身辺に一つの疑問を抱くようになる。それは Casaubon が今、我が物としており、Dorothea との婚約時に Casaubon が示した財産譲渡の遺言書により Casaubon 亡き後は Dorothea に譲られることになっているその多大な財産は、Casaubon 家の長子であった Will のおばあさんのものであり、勘当駆け落ちといういきがかりはあったとしても法的にはその長子相続権は生きていてその直続の男子である Will がそれを得て然るものではないかという疑問である。simple で direct な性格と、現在持っている自分自身の財産だけでも使い切れないものがあり、金銭的なものに全く価値を置かない Dorothea は、もしその疑問通りに Casaubon の財産がなにがしかでも現在金銭的

な窮乏状態にある Will のものであるとしたら、即座に彼に渡すべきではないかと思う。この疑問を夫に問うことが夫の感情を刺激して体に障りはしないかという危惧を押して、思い切って彼女にそれをさせたのは、それまでの Casaubon の生活の中から判断される彼の強い正義感への信頼であった。そういう Dorothea の夫への信頼も空しく、Dorothea のその行為は Casaubon を激怒させてしまう結果となった Casaubon はそれが Ladislaw の Dorothea への入れ智恵であり、Ladislaw 青年が妻の Dorothea を通じて行なった自分への挑戦であって、彼は Dorothea の信頼を勝ち得て夫への尊敬を失わせるばかりか、夫を毛嫌いするようになりそうな種を彼女の心に蒔くつもりには違いないと思う。そしてまた Dorothea に対しては、彼女には夫の行為を評価する癖があり、しかもそれに応じて Will Ladislaw を好意的にみて、彼の言うことに影響される傾向があると独断したのである。それで Will が Lowick 邸に出入りすることを再度禁じさらに心の中で他の手段で彼を挫折させる準備をしたのであった。

すなわち Dorothea が夫 Casaubon の人格の中に確信していた美德のうちのその最後のものであった彼の正義感でさえ、単なる幻想であったのである。Dorothea は Ladislaw 青年との交流から、彼の青年らしい包み隠さない Casaubon への反感を見てとったのであったが、Casaubon 自身もそれを知っていながらこれまで Will のために尽くしてきたその行為は、まさしく夫の正義感から出た行為以外の何ものでもなく、その正義感は Will の反感のうち勝つほどの強いものであると讃嘆していたのであった。しかし(8)の部分でみてきたとおり、Casaubon が Will の生活費のために気前よく小切手を振り出し、Will の求めには積極的に恩恵を施したその行為の背景には、行き方やまた他の細々とした生活面で反目し合う者同士として、それが Will に優越感を持つ最高手段であると彼が考えたその思い以外の何物もなかったものであり、そしてまたその優越感は Will に対する彼の義務の副産物でもあった。

Dorothea が Will に権利があるのではないかという疑問を抱いたその財産の問題については、Casaubon 自身プライドや品位にかかわるものであるだけに、彼なりに頭の中では十分考慮されていたことであって、Will の祖母の遺産が自分のところに入るやいなや行方知れずだった Will の両親を探して援助し、彼ら亡き後は Will を引き取り彼に尽くしたことでそのことから要求される義務を全うし、それで家族間のその問題にはすべて決着がつけられたのだという、実に身勝手な意識を内心持っていたのであった。とにかく彼の行為はその一切が義務で成り立っていたのである。しかしその財産の問題についてはいろいろと不明瞭な部分があることは歴然たる事実であって、それは彼が最も触れてほしくない事であった。それで、そういった Casaubon 家の問題には第三者である Dorothea にそれを指摘されたことに対して、独善的で高慢でさらに極めて sensitive である Casaubon は激怒したのである。

しかし彼がいくら激怒して Dorothea に、今後のそのような彼自身の問題に立ち入ることを禁じたとしても、夫は Ladislaw 一家に負い目があって、Ladislaw 一家の受けた不当な扱いを償わなければならないのだという Dorothea の思いは消すことはできない。結婚してまだ2年というのに、そのような Dorothea は Casaubon にとっては Will と共に、彼の敵愾心

の対象であった Brasenose 学寮達と同様に人生の脅威となってしまったのである。Casaubon は次のような Dorothea への⁽⁴⁾思いを抱く。

彼には力の及ばない事実がいくつかあった。……一つには Dorothea の性格で、それは内面の激しい活動に常に何らかの新しい形をとらせ、そしておとなしく従順である時でさえも、考えるだにいら立つ燃えるような理想をおおい隠しているのだ。そしてまた一つはすでに彼女の心を占領してしまっている、彼が彼女とは多分腹藏なく話し合えそうもない問題に関連したある観念や好情である。Dorothea が彼が妻として求めうる限りの、貞淑で美しいうら若き女性であることは否定できなかった。しかし若い女性というものは、彼が以前思っていたよりはるかにやっかいなものであることがわかったのだ。彼女は彼をいたわり、彼のために朗読をし、彼の求めることはすぐ察知し、そして、彼の感情には十分な気遣いをした。しかし夫の心の中には、彼女が彼を裁こうとしていること、そして彼女の妻らしい夫への献身は、夫への不信感に対する悔悛の情の表明のようなものであって、それには彼自身と彼の行為とが一般的な物事の一部としてあまりにも明白に暴き出されるある一つの比較の力が付随しているのだという確信がすでに場所を占めていたのである。……

かわいそうな Casaubon 氏よ。それが裏切り行為のように思われて、その苦しみはなおさら耐えがたかった。全き信頼を寄せて彼を崇拜していたその若い女性がたちまちにして批判的な妻に変わってしまったのである。以前、批判されたり怒りを感じたりした時の印象は、後になっていくらかやさしさや従順さを示されても取りのぞくことはできないのである。
(chap. 42)

そして「今 Dorothea が沈黙しているのは反抗心を抑えているからであると邪推した。また彼が予期しないようなことを Dorothea が言えば、きっとそれは優越を意識したものであるに違いないと思う。彼女が素直に返事をすればその中にいらいらさせる注意深さを読みとった」のである。小心で嫉妬深い彼の性質は、Dorothea のこととなると彼を痛いほど^(chap. 42)にまで sensitive にし、邪推深くしたのであった。その邪推は更なる邪推を生み、自分の死後の、Dorothea と Will の結婚にまで及び、心の休まる暇もないほどこの二人に対して嫉妬し、特にその結婚が Casaubon 自身に対する勝利を意味するものとなるであろう Will に対して復讐心を燃やすのであった。

Casaubon には Will の他に復讐心を燃やしているもう一人の人があった。かつて彼の出したパンフレットに対して嘲笑を浴びせた Carp とその仲間たちである。Will への復讐については、Dorothea との婚約時代に作成した財産に関する遺言書に何らかの強硬な措置をすることによって達成できそうであったが、Carp への復讐は *Key to all Mythology* を完成させて彼の誤謬を悟らせること以外に方法がなかったのである。ということになると心臓に持病のある自分の、この先に残された自分の命がいくばくのものであるかということが懸念される。主治医である Lydgate は病気の特質上その言明を避けたが、Casaubon 自身にはその Lydgate の話の中に近い将来の自分の死を予感する。この予感は、Ladislav 青年ばかりかそのように彼が強い敵愾心を持って対峙しているそれらの人々に対する敗北を意味し、常に高慢で人より優位に立つことへの欲望が強く、嫉妬深い Casaubon にとっては深い悲しみをもたらすものであった。それで、Lydgate の話がどんなものであり、それから夫が何を判断したかは全く知らないまでも、夫の見るからに悲しげなやつれた様子に思わず手を差しのべた Dorothea

のやさしさをも Casaubon は冷たく拒否したのである。その仕打ちに Dorothea は、結婚後これまでに感じたどんな感情よりも激しい反抗的な怒りを感じたのであった。そして初めて Dorothea は彼らの結婚が無意味なものであったことを実感する。そして 'It is his fault, not mine.' と断言する。しかしそれでも何でも Dorothea は Casaubon との結婚生活を続けざるを得なかったのだ。そして Dorothea は以前にもまして Casaubon との生活にいたたまれないような物憂さを感じるようになっていく。

Dorothea は、自分の好むもの自分の持ちたいと思うものの一切が Casaubon とのその生活の中から除外されているような意識を持つ。彼女は自分にとって大切でもあれば自分をも大切にしてくれるものに憧れていた。太陽や雨のように、すぐためになるような仕事をしたいと心から思っていた。しかし Casaubon と共にいる限り、「永久に日の目を見ないものを作り出すぞっとするような仕事の道具 (apparatus) があるだけの事実上の墓場での暮らしにどんどのめりこんでいく」^(chap. 48) ようなやりきれない気持から解放されることはなかったのだ。

それで Dorothea は、はっきりと自分の死期が近づいたことを感じとった Casaubon の、彼が亡き後、存命中に遂に完成できなかった *Key to all Mythologies* を彼女に完成させてもらいたいという大それた依頼に、Dorothea の少女時代から彼女に仕えてきた Tantrip がその顔色の悪さに驚くほど煩悶したのである。つまりその仕事を続けることの空しさと、たとえ夫の死後であろうともこれまでと一貫した従順な妻であらねばならないという気持との間で苦しんだのであった。かつて Ladislav 青年が Casaubon と Dorothea が新婚旅行中の Roma で Dorothea に説いた、Casaubon が自分の生涯をかけての大望でもあり労作でもあるその *Key to all Mythologies* は決して結実する可能性のない無価値なものであるという見解は、Ladislav 青年の Casaubon への反感と嫌悪の中から言われた言葉であったとしても、それから2年半夫の学問的世界の中心からは締め出されてはいたものの彼の側で細々としたことを手伝って来た Dorothea には、Roma でのその Ladislav 青年の見解が十分実感できるものとなっていたのである。夫が携わる学問についてほんのわずかな教育しか受けていなかったのに、*Key to all Mythologies* に対して Dorothea の方が夫本人よりも正確に判断する目を持っていたのは、夫が自分の egoism を賭けてまことしやかにしてきたものを彼女の方は偏見のない比較 (unbiased comparism) と健全な感覚 (healthy sense) でそれを見たからであった。

単に夫の悲しみを慰めるためにだけ踏み車をふむような空しい仕事をするのが果して正しいことであろうか。また、夫の要望通りにすることを約束したところで現実(8)にそれが可能であろうかという疑問に Dorothea は心を乱す。

そしてここで Dorothea の憐憫は自分自身の未来から夫の過去に、いやその過去から生み出された現在の、運命との厳しい戦いに向けられた。孤独な労働、自己不信という重圧の下に激しく息づいている野心、目標を遠ざかりますます重くなっていく手足。そして今や遂に剣が彼の頭上にふるえているのが見えるのだ。彼女は彼が生涯をかけている仕事を手伝おうと彼との結婚を強く望んだ(7)のではなかったか。
(chap. 48)

もし夫が主治医 Lydgate が一つの可能性として言うとおりにこれから先15年、いやそれ以上生きるとしたら、彼女の日々は夫を助け夫に従うことに費やされるであろうと Dorothea は考える。「しかし生きている者への献身と死者に対する無期限の献身の約束とは深い相違がある」ことも事実である。Dorothea は Casaubon が彼女に与えた返答をする期限のぎりぎり^(Ibid.)まで考え、いよいよ決意を固めて夫のところに行くと、すでに夫は死んでいたのであった。(次号に続く)

注

- (1) Casaubon の昔からの知人であり、また彼が最も恐れている人でもある Carp やその仲間のことをさすが Carp はこの学寮の教授であった。
- (2) Puritanism: カルバン主義の流れをくみ、カトリック教の制度儀式を極度に避けようとして、純粹に聖書の示す神との契約に基づく新たな社会の実現を目指す思想。またその生活態度。
- (3) As Ladislav points out, and as George Eliot would know from her translation of Strauss's *Das Leben Jesu*, German scholarship was at this time leading the world in historical criticism of the Bible. Hence Casaubon's ignorance of the language is a damning comment on this obsolete pedantry. As other references indicate, he is still concerned to fight outdebated battles of eighteenth-century controversy: in his own age he is a scholastic anachronism. (notes.1, chap. 21)
- (4) Lock: 前号 注(4)
- (5) Augustine: 前号 注(8)
- (6) Milton: 前号 注(3)
- (7) Casaubon は *Key to all Mythologies* についていくつかのパンフレットを発表して読者の反響を打診したりしたのであるが、Carp はそれに対して辛辣な校訂本を書いていた。
- (8) 踏み車: treadmill・昔獄舎内で懲罰のために囚人に踏ませた。